

明滅がおそろしい

綿貫孝哉

ぴかっと光る発光体が道の奥に立っている。それは球体で、灯いたり消えたりする。切り替えの速度が早くなったり遅くなったり、誰かがどこかで操作しているのではないだろうか。道を歩く私を監視する誰かが。灯いたり消えたりするその間隙にまばたきを試みる。光が照っているときには目を開いて、光が萎むときには瞼をたたむ。それを繰り返していると、発光体は常に光っているように見えて、世界は恒常性を保つ。私を惑わせる光の切り替えに對抗するようにして、目をぱちぱちさせている。見えていない間隙がおそろしい。向こうで信号機が点滅している。私は青色の光が消えるタイミングで目を閉じ、光が灯くタイミングで目を開けるから、ずっと青。そして急に赤になったりする。見られている。光が点滅すると、私がのろまだとか、何かが語りかけてくるような信号を送られている気がする。私は目をぱちぱちとして信号を拒否するのだ。断線。裁断される光。あの明滅がおそろしいから目を閉じる度に、光が消えて、灯く、情報が分散し、伝線する。そして、世界が、見えなくなる、いつも送られてくる／こない（こわい）、情報はばらばらで、音もよく、聞こえない、電車が／走り去って／裁断されて／しまった四肢／がまとまりなく散らばっている。あちらやこちらに